伊勢物語の編纂意図について

山田清市

伊勢物語の編纂意図について、その構成技法の面を通して考察を加えてみたい。古来伊勢物語は業平に擬せられる昔男の一代記的構想のもとに、その愛と真情のみやびを歌いあげたものとして、うけとめられ愛されて来た。たしかにそれは、この物語の普遍的な性格を表徴するものとして、その限りでは決して不当な評価ではなかった。そしてそこから愛と真実の形象化の典型として、昔男の人間像は措定されてきたのである。

さて昔男の一代記的構想のもとに愛と真実の形象化を担った人間像は、はたしてどのような統一と渾融を保っているであろうか。その点について先ず主人公の社会的地位における身分設定の条件を見よう。

勢語八十四段は、業平とその母、伊登内親王との贈答歌をもって構成された章段であって、古今集、十七、雑上に

も

業平朝臣の母のみこ、ながをかにすみ侍ける時に、業平みやづかへすとて、ときゞもえまかりとぶらはず侍ければ、しはすばかりにはゝのみこのもとより、とみのことゝてふみをもてきたり、あけて見ればことゞはなくてあ

りける歌

おひぬればさらぬわかれのありといへば
いよ〳〵みまくほしきゝみかな　　業平朝臣

かへし

よのなかにさらぬわかれのなくもがな
ちよもとなげく人のこのため（志香須賀本、以下同）

と記載されている。勢語章段の詞章も右とほぼ同様の内容を記載するのであって、よってこの場合の勢語の昔男と記された主人公は疑う余地なく業平を指すことになるが、勢語本文はその主人公の身分をして

むかしおとこありけり。身はいやしながら母なむ宮なりける。（本文、武田本、以下同）

と記して、見るごとくその身分を低いものとして規定するのである。ところが勢語百七段では昔男と藤原敏行の贈答歌をもって構成されるが、古今集十三、恋三にも

なりひらのあそんのもとのいゑなりける女によみてつかはしける　　藤原敏行

つれ〴〵のながめにまさるなみだがは
そでのみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりてかへしによめる　　業平朝臣

あさみこそゝではひづらめなみだがは
みさへながるときかばたのまん

と記載することによって、勢語の昔男は八十四段同様、業平を指すことになるが、勢語本文はその昔男をして

昔あてなるおとこ有けり。そのおとこのもとなりける人を内記にありけるふじはらのとしゆきといふ人よばひけり。

と記して、見るごとく昔男の身分をして八十四段と異なり「あてなるおとこ」と設定するのである。古今集によって明確に業平と決定される歌の主人公をして、勢語では「身はいやしながら」と「あてなるおとこ」と全く相反する身分規定を加えているのである。

こうした差異について、そこにいろ〳〵の問題が提起されてくるのである。先ず第一に八十四段と百七段とがそれ〴〵別人の手になるという想定である。すなわち、仮に八十四段の方を原型勢語の本文と見なすなら、百七段を後人の手になるものとする考え方である。まずこの考え方に立脚して、勢語百七段の構成に検討を加えてみよう。

勢語百七段は全体で三首の歌をもって構成され、その中二首は前掲古今集本文にみるごとく、敏行と業平歌を記載するが、ひきつづいて更に業平歌を一首持っている。いまこれを古今集十四、恋四に記す本文によると

藤原敏行朝臣の、業平朝臣の家なりける女をあひしりて、ふみつかはしけることばに、いまゝうでく、あめのふりげなるをなん、みわづらひ侍といへりけるをきゝて、かの女にかはりてよめる　　業平朝臣

かずかずにおもひおもはずとひがたみ
みをしるあめはふりぞまされる

と記載するのである。すなわち、勢語百七段には、古今集にも共通の左記の三首の歌

(A)　つれ〴〵のながめにまさる涙河——

(B)　あさみこそゝではひづらめ涙河――

(C)　かず〳〵に思ひ思はずとひがたみ――

が記載されているのである。これら三首を含む百七段が後の構成だとするならば、古今集自体は右の三首歌を勢語より採録できないはずであり、したがって古今の典拠資料が問題となるのである。右の三首歌の中、(A)(B)の贈答歌はあるいは敏行集などからの採録と考えられるとしても、(C)歌は古今の詞書にも見るごとく、敏行との贈答歌でなく、また古今には(A)(B)歌は巻十三、(C)歌は巻十四に離れて一首記載されているのであって、古今(C)歌の典拠はやはり業平集ともいうべき性格のものより採録したとみなさざるを得なくなるであろう。勢語八十四段が原型で、百七段が後の構成とするなら、その三首の古今歌の典拠は勢語とはなり得るはずがないからである。とするならば、古今集の業平歌採録資料として信頼できる業平集の存在が、こうした点からも想定されてくるわけである。そしてそれが正当であれば、当然のことながら勢語八十四段の業平歌

　　世の中にさらぬわかれのなくもがな――

もその業平集に収載されていたはずである。すなわち、一方ではそうした資料的性格のたしかなものを保有しながら、「昔男」と記して、その時代をおぼめかし、主人公も「男」という誰ともわからぬ普遍的な性格に拡散せしめた虚構的性格を施した材料から、ことさら採録する必要がどうしてあったであろうか。そうした虚構的性格の内容事項が、業平の誤りなき事跡を語るものとして、勅撰集の詞書にそのまま記載されることは憚られたはずである。

すなわち、八十四段と百七段のいずれかが原型勢語であり、他が後世の付加とする立場をとってみた場合、いずれにしろ以上のごとき不条理に陥らざるを得ないのである。

若しまた古今が、八十四段、百七段の両章段の業平歌を、原型勢語より採録したと仮定するならば、そこに記された昔男を業平自身のことと認定するためには、それが業平自筆になるものと認められる性格を有するものでなければならなかったはずである。とするならば、八十四段において、業平が自らを「身はいやしながら」と謙退する立場は考えられるとしても、一方の百七段において今度は自らを「あてなるおとこ」と記す姿勢は到底考えがたく、そこで八十四段の主人公とは身分を異にする別人とみなされてくるのであり、それをすら古今が、読人しらずでなく、業平と明記していることは矛盾を来たすところとなるのである。

これらの点に関して、現存古今集の業平歌にみる一部の長大な詞書は、原型古今集の詞書でなく、それ以後に出現した勢語本文によって、改変されたものであろうことを、かつて論証しておいたところである(1)。

かくて、八十四段、百七段の両者の本文はそのいずれも古今集の典拠になった原型勢語とはみなしがたく、古今集は勢語と離れて別資料により、成立したことを知らされるのである。もしかりに八十四段と百七段の身分規定の相違をもって、あくまで百七段を後の付加章段と仮定してみるとしても、同じく勢語九十三段の本文では、

むかしおとこ身はいやしくて、いとになき人を思ひかけたりけり。すこしたのみぬべきさまにやありけむ、ふしておもひ、おきておもひ、思ひわびてよめる。

あふな〳〵おもひはすべしなぞへなく
たかきいやしきくるしかりけり

むかしもかゝる事は世のことわりにや有けむ

と記すが、右の歌は古今六帖五に見えるのみで、他文献の一切に所見がなく、古今集に業平と記す百七段をすら後の付加とするなら、この章段も同様、後世の付加章段とみなされねばならないが、その昔男の主人公の身分は、みるごとく「身はいやしくて」と規定されているのであって、同様の付加章段であるはずの両者において、やはり相反する身分規定を加えている事例を見せつけられるのである。

如上のことは、勢語の基本的性格においてすでに書き出しに「昔男ありけり」という虚構的性格をうち出して、その男に不特定多数の色どりを持たせているごとく、その昔男の業平が、ある段では「身はいやしながら」であり、他の段で一転して「あてなるおとこ」と記されようと左程、意に介することがない点に章段構成の特質があったことを知らされるのである。昔男をあくまで業平像に結びつけて、業平歌だけを中核とする短少な原型勢語を想定し、その条理に適合しない章段や箇所を、すぐに後世の付加改変とみなすような発想も、この物語の構成形態の特質を、見落すところから生れるのであろう。したがってそうした手法の特質を見る時、一つの主題のもとに、一つの性格を担って、自らの運命をつむぎ出して行く主人公の、統一体としての人間像の造形手法とは凡そ相反して、明らかに分裂不徹底なものを、そこにのぞかせることになっているのである。

このことは主人公の人間造形のみに限らず、章段配置の面にも伺われるところである。初段に初冠を、末段に辞世歌とみなされる内容を配して、一代記的構成を装いながら、二十三段では再び年少時にさかのぼるような章段がきたり、十六段では紀有常の妻の出離をめぐって、友人との厚情の物語を描きながら、再び三十八段に来て、紀有常の名を持出して、その帰りを待ちわびた男との贈答歌章段が配されていたり、八十三段では小野に隠棲された惟喬親王をお見舞した業平の話にひきつづいて、八十四段では、長岡に住まれる母宮からの歌と、業平の返歌で構成されながら、

次の八十五段では内容的には一段前の八十三段につながって、正月に出家された惟喬親王のもとに、主人公や人々が会し、雪にこと寄せて親王を慕い奉る歌を詠むような章段構成になっているのである。現存形態に後世の大きな意図的改編を想定する場合、この八十四段の位置などは、まことに説明のつきかねるものとなるであろう。こうした章段配置にみる構成上の不統一は、みて来たごとく、その主人公の身分上の不統一にもそのままつながっている性格なのである。すなわち一応類似章段の類集への試みはなされていながらも、必ずしも綿密に、全体的に構築された相貌を呈してはいないのである。そしてそれは、主人公の人間像形成の上にもまたみられるのである。すなわち、昔男の歌才は、まことにすぐれたものとして、その詠歌は例えば人々をして九段では「から衣きつゝなれにし」の歌によって「みな人かれいひの上に涙おとして」しまうほどに人々を感動せしめ、「名にしおはゞいざこと問はむ」の歌によって、「舟こぎりて泣きにけり」という有様であった。右の二首は古今集にも記載され、作者を業平と明記しているのである。ところが古今集に同じく業平と作者名を記す勢語八十七段の歌には

ぬきみだる人こそあるらし白玉の
まなくもちるかそでのせばきに

とよめりければ、かたへの人わらふ事にやありけむ、このうたにめでてやみにけり

と記すのである。右の勢語本文「わらふ事」と「めでて」の関係が不詳で、非定家本系の本文によると

わらふ事にやありけむこのうたにてやみにけり　（通具本）
わらふことにてありけんこの歌をよみてやみにけり　（大島本）
わらふにやありけんこの歌をよみてやみけり　（塗籠本）

となっていて、非定家本系本文では意味が明白になる。両系のいずれが、原形本文に近いか、慎重を要するが、九段で見た業平歌の感動や涙は、一転して「笑ふ事」というような言葉をともなって、うけとめられているのである。そこには涙や感動の真実とは、およそうらはらな性質のものが、ただよっているのである。単にそれのみにとどまらず、歌によってあれほどに人を感動せしめたはずの主人公が、「もとより歌のことは知らざりければ」（百一段）となり、「歌はよまざりけれど世の中を思ひしりたりけり」（百二段）と、全く歌才のない男にすら変身するに至っているのである。

それはまた主人公の個性的面でも見られるところであって、先ず或る面では、「かのまめ男」（二段）であり、「心ざし深かりける人」（四段）であり、したがって「こと人はいとなさけなし、いかでこの在五中将にあはせてしがな」（六十三段）と思われ、「思ふをも思はぬをもけぢめ見せぬ心」（六十三段）の持主として、まことに「いとまめにじちようにてあだなる心なかりけり」（百三段）と表記されているのである。右の性格を担う主人公はその中、二段、四段、百三段は古今集同一歌の作者名によって、業平その人に結びつくが、六十三段、つくも髪話にみる章段の歌

さむしろに衣かたしき今宵もや
恋しき人にあはでのみねむ

は、古今集読人しらず歌の改作とみなされ、本文にも「在五中将にあはせてしがな」と名をあらわにし、その内容事項がいかにも創作的性格が色濃いものになっていて、業平の事実談とは到底みなされないにかかわらず、その性格は破綻を来たすことなく、相通ずる性格を担って構成されているのである。ところが他の章段では「心つきて色好みなる男」（五十八段）となり、「色好むといふすきもの」（六十一段）と評され、あげくには「あだなる男」（百十九段）と

いう有様になっているのである。五十八段の歌は作者不詳、百十九段は古今集読人しらずで、六十一段は拾遺集によって業平に結びつくのであるが、見るごとく、業平と結合する主人公自体にも、業平らしからぬ要素を持つ主人公の面にも、不徹底な相反する性格をそれぞれ担っているのである。昔男の主人公が古今集等によって明らかに業平と認定される人間像自体に、このような分裂を持っていることは、それらの現象が単に後世の付加等によるものでないことを伺わせずにおかないであろう。とするならば、主人公のこのような性格の分裂は、作者の編纂意図が必ずしも統一体を持った一個の人間の運命や形姿を主題にしたものでないことをうら書するものといえるのである。たしかにそこには主人公の総体的な人格の成長も魂の発展もなく、個々別々に分断された偶然的な歌話のよせあつめのような様式を強く印象づけるものとなっているのである。例えば二十五段のように古今集では巻十三に題しらずとして、両者関係なく単に並記されているにすぎない業平と小町の歌をあわせて、贈答歌にしたてている手法がそれであり、また勢語中、最長章段の六十五段の構成でも、帝の寵愛深い女に「在原なりける男」が思いをかけて、そのあげく近国に流されても、蔵に監禁されている女のもとへ、毎夜配所から来て笛を吹くという話も、まことに劇的な流れの中に統一されているが、そこに使われている五首の歌はその四首までが、明白に古今の巻十一、十三、十五、の読人しらず歌より採った組合せより成り、それぞれの関係ない歌が右の構成の中に息吹きを与えられ、配置されているのである。すなわち、六十五段も二十五段もその構成手法において全く同じ性格にもとづくのであって、二十五段の小町の歌を後の付加などとする考えが出てきたりするのは既述のごとくこの物語の構成技法を無視して、その原形を業平中心のものに見定めようとするところから生ずる偏向の結果であろう。とまれ、六十五段にみるごとく各章段に採録された和歌が、その章段構成の中核におきすえられ、その和歌のつむぎ出す情感の色あいを、作者の主観の色どりに染

めあげて、そこにかもされる人間群像の心のかげりを、詞章のつながりを通して練りあげて行くところにこそ、この物語の構成における作者の方法的達成があったのである。そのことは、和歌という制約された言語世界の中に、人間の心をかたどり、愛と信頼のきずなの美しさやあわれさを浮かばせて、そこに真情への思慕と、みやびの世界への郷愁をよせている作者の心託が伺われるのである。

そしてそれは、時の藤原体制の官僚機構から疎外されたところに身を置いていたであろう作者がせめて和歌世界の中に自らの自由と慰めを見出し、夢や郷愁をもおりこめて、そこに生のあり方をつなぎとめようとした営為のなかにこそ、この物語は構築されていったと見るべきであろう。まこと業平に擬せられる主人公は「京にありわびて」（七段）「京やすみうかりけむ」（八段）「身をえうなきものに思なして」（九段）東国へ下って行くが、そうした主人公の心象のかたどりは、作者自らの疎外感の反映にほかならず、そこに表白された歌の世界は、流離漂泊の情感をうらうちすることによって、昔男の心象を染めあげるのに極めて効果的な達成を示すことになっているのである。すなわち現実そのものに即して、そこから客観的に形成されていく世界でなくて、あくまで和歌を中核におきすえて、それを作者の主観の色どりの方向に、より鮮烈、効果的に詞章を動員し、方向づけ染めあげて行く虚構的手法そのものの中にこそ、この作品の構成技法がおりこめられているのである。故にこそ、主人公の身分が、「あてなる」男から「いやしき」者にかわろうと、「いとまめにじちようにてあだなる心なかりけり」であったはずの男が、他の段で「あだなる男」に変身しようと、人を感動せしめた歌才の主人公が「歌のことは知らざりければ」に変ってしまおうと、その場その場であくまで和歌を媒介にして染めあげる自らの情感の世界の表出であってみれば、右のごとき不統一混乱は左程、意に介するところではなかったといえるであろう。

この事は例えば、勢語二十三段の筒井筒歌話において、互いに思いをかわした幼ななじみが結婚後、女の親の死を契機として、男は河内国に別の通い所を持つに至っても、

風ふけばおきつしらなみたつた山
夜はにやきみがひとりこゆらむ

という夫の身を案ずるもとの妻の歌によって、男は河内へ通うことを思いとどまることになるが、それはあくまで女の美しく悲しい真情が、和歌という表現行為を媒介にして、男をとらえているのであり、心の橋梁は和歌によってかけわたされ、その結果男の真情をよびさまし、それが現実を獲得せしめるものとなっているのである。

また次の二十四段では、京にのぼったまま音沙汰ない夫を三年間待ちわびた女が、他の男を迎えようとする夜、帰って来た夫に戸もあけられず、歌をもって事情を訴えると、理解した夫は仲よくせよと歌で答えて立ち去って行く。女は夫を歌で必死にとどめようとするが、男は再びもどらない。女は男のあとを追い、泉のほとりで力つきて倒れ、指の血で岩に歌をかきとどめてこと切れるというこの章段は、四首の和歌でもって強固に結合され、物語の進展は和歌の展開を通して層次的につみ重ねられ、最後の女の血の歌に至るのであり、ぬきさしならぬ緊密な構成を歌そのものが保っているのである。そこには二十三段と対照的に互いの運命の破綻を歌でつなぎとめようとしながらも、遂に防ぎ得なかった悲劇の相をうかばせる手法として、あわれな女の心象を

あひおもはでかれぬる人をとゞめかね
わが身はいまぞきえはてぬめる

という歌を通して最高度にかたどり、みごとな心情効果をかち得ているのである。

如上の両章段において、二十三段は田舎廻りの行商人の子供の話であり、二十四段は、生計のために京へ働きに上らねばならなかった男であって、業平とはおよそ懸絶した世界の主人公達であり、民間伝誦等がその母胎となっているにしろ、いずれも女の真情を高めるために簡潔にして緊張した内容の展開は和歌が中心の骨格を形づくり、その真情の高揚した頂点におきすえられている。すなわち業平に関係の遠いこの両章段の構成技法は、他方古今集の記名によって、その主人公が業平と目される章段、例えば東下りや伊勢斎宮談や、惟喬親王をめぐる章段構成の手法と全く等質の相通ずるものを見出すのである。

すなわち勢語の作者は業平関係の有無にかかわらず、和歌を素材にしながら、それをまた目的それ自身ともして、それを活かすために詞章を動員し、章段構築を試みるのである。前記の二十三段には五首の歌を配するが、その中の二首は、古今集十八の読人しらず歌と、万葉集十二より採録されたことが伺われ、二十四段の四首の中、一首は万葉集十二や猿丸大夫集にみる類歌であって、よせ集められたこれらの歌に伝誦歌や、恐らく作者自身の創作歌も組合わして、全体の構成をなしとげていくのである。そしてその手法は業平関係の明らかな章段にもそのまま適合していくのである。例えば九段の東下り章段四首の中

するがなるうつの山辺のうつつにも——

は忠岑集にみる類似歌であり、同じく

時しらぬ山はふじのねいつとてか——

は典拠不明歌である。更には惟喬親王をめぐる八十二段六首中にも

ちればこそいとゞ桜はめでたけれ——

は、誰ともわからぬ典拠不明歌であり、

をしなべて峯もたひらになりなゝむ――

は後撰集に記すごとく、上野峯雄歌であって、業平的色彩によって、ぬりつぶされている章段にも、やはり前記の二十三、四章段で指摘したのと同様の手法の特質が、色濃く影を落しているのである。かくして業平に関係の深い章段にもほど遠い章段にも通ずる構成技法がそこには定着しているのであって、そのことは同一作者の手をそこに伺わせずにはおかないであろうし、更にまた、業平のみに焦点をあわせようとする視点からこの物語の原形や成立意図を考える立場にも一つの反省をもたらさずにはおかないであろう。二十三段や二十四段に限らず、その他業平に関係のうすい性格の章段にも、作者の意図や方法が深く沈潜していることを見のがしてはならないのである。たしかに古今集の記名によって、昔男が業平と証される前記東下りや伊勢斎宮談や、惟喬親王をめぐる章段群には、昔男を失意不遇の人間像に染めあげて、感情の自由や真情を求める形姿をおりこめた手法の達成によって、そこに共感と思慕をよせた後世の人々をして、業平的人間像への追慕のあまり、業平に関係うすい他の章段の主人公達も、ひとしなみに業平に結びつけて解する態度が生まれ、誰ともわからぬ女にも業平の視点から結びつけた注を施す幾多の古注書の出現ともなったのである。それにとどまらず、それは業平自筆本というような伝本の名称を生み出し、更には成立論にまで波及して、その原形は業平関係のみの章段形態を想定するまでに至らしめているのである。したがって現存形態は三次元的な発達にもとづくという仮説まで出現するに至っているが、それら諸説の根拠については一々認めがたい論証をすでに加えたところであるので(2)、本稿では省略する。たしかに作者は業平的人間像の形成に、自らの心象を投影せしめているが、みてきたごとく一方ではその主人公の身分規定や個性の分裂、章段配置の不統一にとどまらず、

業平と全く関係ない幾多のすぐれた章段を、よせ集めた歌によって構築し、そこに多くの虚構的手法を導入して、すぐれた歌話を生み出しているのである。しかもその技法はあくまで和歌を中核にして詞章を動員し、選んだ和歌そのもののなかに人間の真情やさまざまな形姿をまさぐりつつ、そこに自らの抱懐する和歌への理念を軌跡として、人間への志向をおりこめているのである。すなわち和歌に感動の真実の具象的表現を求めて、その働きの中に人間的真実と愛への郷愁をつなぎとめ、生の証しを見出そうとしているところに、この物語における編纂意図と技法の基本的性格が見出されるのである。

註

（1）拙著『伊勢物語の成立と伝本の研究』桜楓社。（昭四七・四月）

（2）同

（補註）

かつて学界に紹介した『通具本伊勢物語』の性格について該本が、九十七段の一章段を全く記載しない点から、定家本系等に先行する一証とみなしたのであった。九十七段は、藤原基経の四十の賀における歌を持ち、勢語はその作者を「中将なりけるおきな」と記すので、勢語における「中将」の表記はすべて史実上の業平と結びつくことによって、この歌も業平であるはずだが、右の貞観十七年の賀宴には、業平は中将でなく、史実と齟齬する上に、古今集伝本にも作者を「行平」とするものが数多い点から、作者を業平とする古今集伝本によって、後に補入された結果でないかと疑ったのである。しかし勢語の作者論で、私稿本との関係を考察した際、その保持者を作者と考えたこともあったが、明らかにこの章段は業平の官歴と矛盾を来たすのに、私稿本は作者を業平としており、それが後世の改竄でない限り、その所持本の記名をそのまま誤って、章段を構成したことになり、よって当初よりこの章段は存在したことにもなるので、やはり通具本の脱落とみなした方が、蓋然性があるように思われる。今後、更に通具本系統の書本でも他に出現すれば明らかにもなろうが、岡一男博士の御示教によって、この機会を借りて、今は如上のごとく考えておきたいことを補記する。

筆者は本学教授・国文学